
瑞守くんの浪人生

黒屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑞守くんの浪人生

【Nコード】

N7884B

【作者名】

黒屋敷

【あらすじ】

大学に落ちた主人公瑞守樹みずもりいつぎがある事情で波乱万丈な浪人生活を送ることになった

第1話・浪人決定

第一幕“浪人誕生”

桜の木が春に向けて芽が実る冬の末期、微妙とも言えるこの時期にある戦いが繰り広げており、僕はそれに参加していた。

『大丈夫　大丈夫：僕は受かってる　受かってるんだ……』

一生懸命に何度も何度も白いシートに覆い被された分厚い看看板に両手の指と指を握り祈りを捧げて目を瞑る僕、瑞守樹はいた。何故祈りを捧げてるかって？　そりゃ勿論今日が……。

『僕は絶対大学に行きたい！頼む神よ！』

大学受験結果発表日だからである。

この時期はやっと高校と言う門を乗り越え社会と言う人生の扉を開く時期であるもしこれに失敗したら後先パーになるかまたはもう一度這い上がるため、死ぬような勉強地獄を再びやることになる。そんなの二度とごめんだ。

すると合格者発表を隠していたシートが大学の教職員にめくられ合格者番号が露わになる

一瞬、目を瞑った僕だが

『……よし、目を開くぞお……』

この瞬間が誰でも一番恐い瞬間でもある例えばあれだ。ホラー映画でお馴染みの目を開けるとそこに幽霊やら殺人鬼やらがそこに居て恐ろしい形相で睨まれ殺される。それと同じ通りであり、この場合は目を開けたら 番号が有るか無いかで大学への扉を開くか、もしくは扉が開かずそのまま絶望の奈落の淵に真っ逆様に落ちるかのことちかである。

『……んぐ……』

緊張のあまり唾を飲む

そして

僕が目を見開くとそこには素敵な光景が広がっていた。

あたりから（やったー！有った！）などの歓喜と希望の声や（うああああ！無ねえ！そんな馬鹿なああああ！）などの地獄に突き落とされた者の嘆きと悲鳴の嵐だった。

僕はこの嵐の中、合格表に目を食い入る

『えーと、僕の番号はたしか224だった筈だけど……』

表から自分の番号を探す しかしこの大学以外に入学希望者が多いので番号列を探すのも大変であるしかしようやく僕は224の番号があるとされる列を見つけ自分の番号を探す。

『……あれ？』

僕は自分の目を疑った 気のせいだろうか自分の番号が無いような……いやいや！そんな筈はない！あれだけ数々の神社にお参りに行ったり七夕の短冊に合格しますようにと織り姫と彦星に送った合格できますよメッセージを送った筈だ！ だから絶対にある筈だ！！

『何かの間違えだ……もう一度目を瞑り伺おう ひょっとしたら目が疲れてるだけかも……んっ！』

再び目を瞑って目をカッと見開きそして見る！だが

『…………だああああああ！！無いいいいいい！！』

さっきの脱落者の断末魔やムンクの叫びをはるかに越す叫び声を発した僕は現実と言う怪物に見事に食われ、そして大学と言う未来の扉を開けられず、受験戦争と言う大戦争に僕は敗死した。

落胆から数時間が経過した僕は大学の近くにある電話ボックスにいた。

『あはははっ！そうか、落ちちまったかそりゃ残念だなあ！』

耳元で受話器越しに聞こえる腹立たしい我が姉・瑞守奈恵の笑い声が電話ボックス内に響く。

僕より二才年上で美人の眼鏡女性だが未だにフリーターをやっている人生をことごとく舐め続けている駄目姉である。

『よくまあ…自分の弟が受験に落ちて笑ってられますね〜』

『うん！マジ笑えるあっはははははは』

再び受話器越しで笑う姉。何故だろう 頭の中の脳に電気信号が流れ今まで考えてなかった思考、殺意が芽生えたような気がした。

『ああ…はいそうですか では笑い続けてください そして顎が外れて死んでください頼みますから』

『そう怒らないでよあたしの可愛い弟よま、落ちたことについては残念なのは分かる すっごく分かるわよ。だ・け・どその気持ちのままではイケナイのよ 分かる？』

急に真剣なことを言ってくる姉

そりゃまあ〜そうである。このままウジウジ落ちたことを悔やんでも誰も助けてくれないし、何も起きないのは確かだ。

『それにさ 折角なんだし 浪人生を少しエンジョイしたらどお？』

『エンジョイって遊びじゃないんだから真面目に考えてよ』

『そりゃ遊びとは言っていないよ だけど この機会を逃したら大学を再び目指すことなんて二度と無理かもよ』

たしかにこの機会を逃したら後先面倒になることは間違いない。ならばこの機会を利用して勉強に励めば今度受験を受ける時 落ちる可能性も減る。しかし……

『はぁ…また受験地獄をやるなんて 嫌だなぁ……』

僕はさらに落ち込む

『まあ 元気出して 何とかなるわよ……あ、そうだ。父さんと母さんからの伝言だけど』

『え、父さん母さんから伝言？ んで何？』

奈恵姉は受話器越しから芝居がかった 父さん母さんの物真似をする

『えー 我が息子へ 私達はお前の今の気持ちはよく分かります。しかし、これも何かの運命だろう これから大変かも知れないが一人で強く生きよ。ではそゆことで。』

って、おおおおおい！ かわいい息子を見捨てるのか！ と心の中で阿鼻叫喚する

『追伸…あ、それとお前が一人暮らしをするために“ある寮”に一部屋の住居届けを出しておいた。引っ越しの手続きもしておいたからその寮でこれからの人生のことをよく考えるように…だそうよ』

何てネガティブな内容なんだろう。聞いた僕は思わず泣きたくなつた。聞かなきゃ良かったかも知れない。

『うう…悪夢だ…』電話ボックスの中で思わず座り落ち込む

『…まあまあ　そう気を落とさないで、二人共　こんなこと書いてるけど本当はすごく心細くて悲しいのよ。だけどあんたのためを思つてやってるんだから』

奈恵姉は励ますように受話器越しの僕に言ってくれる。

『……分かったよ、とりあえずその寮に行ってみるよ。んで何て名の寮?』

『寮の名前は“ひのえ荘”　ひのえ神社の当主が大家をしているってさ』

続く

第1話・浪人決定（後書き）

初心者です よろしくお願いします

第2話・出会い？

『ああ…何とか冗談でしょ？これ』

現地についた僕の目の前に飛び込んできたのは果てしなく長く険しい万里の階段だった。実際は万里ほどはないかも知れないが僕の目にはここまでの道のりの疲労せいか、もう万里の階段に見えていた。

『はあ…ここに来るまででさえ険しかったのに、結局これか？』

ざっつけんんなああああ！！と怒鳴りたいが疲れてダルくて言えなかった。

『たく、エスカレーターくらい付けろっての、って言ってもわざわざ神社にエスカレーターつける和尚がいる分けないよなあ…』
僕は果てもないような階段を疲れた半眼で見つめ。

『ぜってえく和尚に会ったら慰謝料請求してやる！』

疲れた足取りで僕は階段を登り始めた。

僕が登り始めてから10分　ようやく頂上の神社の社が見えてきた。

『はあ…はあ…ぜえぜえ　よっ　ようやく頂上付近まで着いた…』

ひどく荒れた吐息を吐きながら僕は最後の段を登り切ろうとしていた

『うう：長かった、長かった さあ これで最後の段だ！これで登り切れる：』

そして僕は最後の段を歩む するとそこには素敵な光景が目に入っ
た。

目の前に広がったのは春の開花を思わせる満開の桜だった。桜は春風と共に花びらを舞いらせていたとても綺麗な光景だった。思わず写真に撮りたくなるようなそんな風景。するとその素敵な光景の中に一人の少女が現れた。

春の季節を思わせる服装に栗色のかったブロンド髪、透き通るような肌を持ち、極め付きにはサファイアのように青い輝きを見せる綺麗な瞳を持っていた 僕は思わず彼女に見取れてしまった

嗚呼！神よ！これはご褒美でしょうか？ここまでの道のりを一生懸命頑張った僕に贈られたプレゼントでしょうか だとしたら 神よ 有難う！！と僕が頭の中の神に感嘆していた時一つの春風がビュ〜と吹いた。すると

『えっ：』

思わず呆けた声を出す僕、何故なら今の春風が吹いた時 少女が履いていたスカートがめくれ 可愛い熊の絵柄が載った白い生地を見してしまったのだ

僕はぶほっ：と鼻血を出しそうになったが堪えた。すると呆けた声を出した僕に気付いたのかスカートを風から防いでいた少女が悲鳴

を上げた

『いやあああああああ!!』

『あ、いやその 決して見たくて見たわけでは…』

と誤解を説こうと必死で彼女に説明をしようとした しかし 次の瞬間 僕の目にとんだものも映った。

さっきまで桜の風景とけ込んでいた彼女が猛スピードでこっちに走ってきたのだよく見ると顔が羞恥のせいで赤くなっているのか？さっきまでサファイアだった目は怒りのせいで充血した目でサファイアではなくなっていた。正直に言おう。

『こっ：怖えええええええええ!!』

正直な気持ちで僕はそう叫んでいた。

『と、とにかくここは逃げねば!』

きびすを返し再び僕は万里の階段を走る
しかし

『逃がすかあああああああ!!』

後ろから美少女の声とは思えない声を叫び彼女は僕を追いかけてきた。
た。

階段を走りながら
僕は思った。

『うう…何故こんなことに…大学に落ちて浪人になって不幸真つ逆様な僕がもう一回やり直そうと決意を固め浪人生活を選んだのにまたこんな不幸な目になるなんてえ…もし神様がいたらぜってえ殴る！！』

さっきまで自分が感謝感激していた頭の中の神様に僕は怒りの鉄拳で神様の顔を殴りつけるが妄想なので意味はなかった

『待ちなさあああああい！！痴漢男さん！逃げられると思ってますか？こらあああああ！！』

待つか！待ったら絶対殺される！そんな気がする それに聞き捨てならないことがあった それは

『誰が痴漢男さんだああああ！！僕は健全な一般人だ！そんなアブノーマルな趣味は持ち合わせいない！！』

『だったら何で逃げるんですか！一般人なら普通逃げないでしょうがっ』

『そんなおっかない顔で迫ってきたら知能が少ないチンパンジーでも逃げるわ！！』

その時、世界が止まった。

あつ…やばい 言っではならない言葉を僕は言ってしまった刹那、後ろからものすごい殺気を感じた

『な、ななな、ぬうあんどうえすってええええええええええ！！！！』

そう叫ぶ彼女。するとさっきまで僕の後ろを走っていた彼女はいつの間にか僕の前に立っていた
げげっ！瞬間移動！？と思ってしまうほどの瞬間だった。下に降りる階段への退路を完全に塞がれ逃げられる状況ではなくなった僕は……。

『あっ……いやその何でしょう……い、今さっきのは訂正して

「美形の男子も尻尾を巻いて逃げるほど美しい天使のような顔でした」なんて……』と

弁解を試みるが、あまりの恐怖で自分でも何を言っているのか分からなかった

『……言いたいことはそれだけですか？』

淡々とした不気味さを感じさせる口調で彼女は言ってきた 殺気がさらに膨れ上がったように思えたまずい、このままじゃ確実に殺される（多分）こうなったら

『いやその！僕はこの ひのえ神社のひのえ荘に今度から引っ越してきました 瑞守樹と申しまして』

仕方なく事情を説明を試みるが

『言い訳ですか？』

完全に信用してない冷たい口調で言ってきた

『いっ……言い訳じゃありませんです！』

証拠なら はい！この契約書に……』

僕は背負ってたバッグから一枚の紙を取り出す

『見せてください』

そう言われて僕は契約書を彼女に渡す

ふむふむと頷きながら読む

そして理解したのか契約書を僕に返してきた

『どうやら本当のようですね。ちゃんと契約書にひのえ荘の拇印も押されていましたし……失礼しました。あなたがひのえ荘にお引越してきた 瑞守樹さんですね?』

さっきまで凶暴な感情が完全に消え去ったのか。初めて見た時と同じような顔で微笑んできた

『はっ…はい』

『ごめんなさい 最近この神社付近に痴漢とか出没することがあるので瑞守さんのことを痴漢と勘違いしてしまいました』

彼女は頭を下げた

『あ、いえいえ! こちらこそ 本当にごめん。さっきはその…事故とはいえ見てしまったり、怖い顔とか言っちゃって……』

すると彼女は何故か俯くと耳元に手を当て何かをぶつぶつ呟いていたように見えたが すぐに顔を上げて笑顔で返してきた

『いえいえ! 別に気にしていませんから』と応えてきた。

しかし さっき俯いていたとき 彼女の顔に一瞬だが陰がさしていたような…気のせいかな……。

『とにかく ここに居てもしょうがないので神社の方へ行きましたよ。あ、申し遅れました 私はこの ひのえ神社の神主の孫娘の“楠乃なずさ”と申します。

それが僕となずさとの初めての出会いだった。

第3. 1話

さて、これから僕は独り言をします。

まず今僕が居るのはホコリとダンボールが支配する薄暗い物置部屋です。

しかも僕は手足をロープで縛られ動けません。あとついでに荷物も没収されました。

さて、この状況を見てどう思います？

仮説1・あきらかに誰かに拉致されて、今頃その犯人は親か警察に僕の身代金を要求しようとしている。ごく単純な誘拐犯に捕まったか？

仮説2・宇宙人に標本サンプルとして宇宙船で拉致された……と言っても物置部屋のある宇宙船とロープで拘束する宇宙人なんか居るのかは不明だが……

仮説3・ある事故でオヤシロ様の祟りを受けてしまい、目が逝った

竜宮○ナと園崎魅○にナタと危険薬物が入った注射で殺されそうな状況にあるか？

さて！どれだ！！

.....

当然、誰も応えてくれず瑞守くんは物置部屋で朽ち果てたとさ……めでたし、めでたし

『めでたし　めでたし……じゃねええええええ!! てか何! ?
つか誰!? 勝手に僕の状況を選択問題にするなあああ!! あと
危ない問題を出すな! まんま、ひぐら○のなく頃に（鬼隠し編）、
じゃねえかよ!!!』

え、いいじゃん。どうせ死ぬ運命だし

『死なねえよ！！第一何で僕が死ぬの？ただ物置部屋に閉じ込められてるだけじゃん』

ふつ、君には分からないのも無理はないさ。

「なんで？」

ボウヤだからさ……

『意味わかんねえ!! つか本当に誰?』

何を言ってるんだ!? 君はパトラッシュじゃないか! ネロが“パトラッシュ……僕なんだかもう眠いんだ”とか言って死の道連れにされ あきらかに変態的な羽とワツカがついた全裸姿の天使に連行されたかわいそうな大型犬のパトラッシュじゃないか!?

『そうか…僕はパトラッシュだったのか…クソ! ネロめっ よくも僕を道連れに……って違あああああう! 説明長ええし! しかも何で僕がパトラッシュになるんだよ!!』

……とか言っておきながらノリノリじゃないか

『くっ…乗せられた自分が恥ずかしい。とにかく、お前誰だよ? 真面目に』

僕は僕だよ

『いやだから誰?』

僕は君で、君は僕と言ってもいいな

『意味わかんねえんだけど……』

だろうな。そうだなあ意味不明な状況に陥ったからこんな状況になったと言ったらいいかな？

『余計訳分らないんだけど』

思い出してみろ 何でこんな状況になったか そして、キツカケを……

『うゝゝゝん たしか……なずさちゃんがひのえ神社を案内する
とか言って…その後は……』

そして僕は頭の中の記憶の辿っていった。それは少し前に遡る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7884b/>

瑞守くんの浪人生

2010年10月28日04時19分発行